『美は乱調にあり』 瀬戸内寂聴

岩波現代文庫／2017年1月／980円（税別）

連作である『諧調は偽りなり（上）（下）』（同／2017年2月／同）と共に、副題は「伊藤野枝と大杉栄」である。94歳の著者が、400冊を超えるという自作の中で「今も読んでもらいたい本をひとつあげよと云われたら、迷いなく即座に」挙げるのが、この一連の作品とのことである。これらは、1923年の関東大震災の大混乱の中で、夫であった無政府主義者大杉栄と6歳の甥と共に甘粕正彦憲兵大尉に虐殺された伊藤野枝の、28年間の短くも凄まじいまでの疾風怒濤の人生を見事に描ききっている。

前者は1965年に、後者はその16年後に執筆されたものである。野枝はわずか28歳の生涯で、思想家辻潤と大杉という2人の夫との間に実に7人の子供を産み育てる一方、女性解放運動を始めとする様々な社会運動でも活躍するという濃密な人生を送った人物であり、そのバイタリティ溢れる生き様が克明に跡付けられている好著である。

『サッカーで日本一、勉強で東大現役合格』

小澤一郎

洋泉社／2017年4月／1400円（税別）

副題には「國學院久我山サッカー部の挑戦」とあり、高校生にとっての永遠のテーマとも言える文武両道＝勉強と部活動との最高レベルでの両立を目標として掲げる同校の指導者や卒業生などへの取材を通して、その挑戦の姿があくまでも冷静な視点で描かれている。

『大予言「歴史の尺度」が示す未来』 吉見俊哉

集英社新書／2017年4月／840円（税別）

ブローデルやホブズボーム、ウォーラーステイン、エマニュエル・トッドなどなど原典を読み直してみたいけれど、なかなか落ち着いて読む時間は取れない。彼ら偉大な歴史家や社会学者が数多く登場し、そういえばそんな話を書いてあったなと思ひ出させてくれる本だとは、書名からは連想できなかった。

25年を単位として歴史を捉える方法は、特に日本戦後史の授業で有効ではないだろうか。コンドラチェフの波を高く評価し、波の含意を詳しく説明しているのだから、地歴公民科の教員同士による学習会のテキストとして最適に思える。ぜひ専門の異なる教員同士で議論してほしい。

『シベリア出兵』 麻田雅文

中公新書／2016年9月／860円（税別）

シベリア出兵という政策的決断に至るまでに、これほどまで慎重論や反対論があったとは……。山県有朋が言ったという「撤兵の案が立っていないうちは出兵するな」との発言にはうならされた。

教科書では寺内首相くらいしか登場しないが、当時の軍部の主な登場人物として上原勇作、田中義一、米内光政といった人名が出てくるのは興味がわくし、ここで特務機関が設置されていくというのも、昭和史との関係で感慨深い。

陸軍の機密費が当時の新聞界に注ぎ込まれ、現在の四大有力紙の一つが、資金援助とひきかえに軍部推薦記者を主筆に迎え入れて社論を転換したそう。

以上、読み所満載の本書の一部を紹介した。

『[新版]独ソ戦史』 山崎雅弘

朝日文庫／2016年12月／860円（税別）

不倶戴天だったはずの両国がなぜ不可侵条約を結んだのか、そこから本書は始まる。資料に肉迫し、可能な限りヒトラーやスターリンの思惑の解明が試みられ、彼らの性格まで見えてくるようだ。

しかし何といっても、文庫で400ページ近い記述の大半は、一日当たり平均約一万人の戦死・行方不明者を出したという戦闘シーンだ。零下20-40度で外套も防寒手袋・靴も支給されず戦うドイツ兵に、凍傷で手の指や足の肉を失うものが続出した、といったくだりに戦争の酷薄さが凝縮して描かれている。

『ロシア革命 破局の8か月』 池田嘉郎

岩波新書／2017年1月／840円（税別）

ロシア革命から100年の今年、ロシア史のニューリーダーがいよいよ一般読者向けに新書を著した。1917年に焦点化し2月革命から10月革命までに絞り、様々な政治家を登場させ、農村や女性にも目配りをしながら叙述を重ねていく。紹介者は無学のためそのほとんどの人物は初見であったが、写真が配され、性格面や見た目の特徴も記述されている。

ただのお堅い事実の羅列ではないところが高校での歴史の授業にも通じるのだが、本格的な歴史叙述でありながら俗っぽい言葉も散見される点は非常に実験的であるように思われた。歴史叙述のありようについても一石を投じているのではないだろうか。